

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号: 32611

研究種目: 基盤研究(C)

研究期間: 2009～2011

課題番号: 21520158

研究課題名(和文) 19 世紀および 20 世紀前半におけるポピュラー・コンサートの研究

研究課題名(英文) A Study on the popular concerts in 19th and 20th century.

研究代表者

吉成 順(YOSHINARI JUN)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号: 60183703

研究成果の概要(和文): 1830 年代にパリで始まりその後ロンドンで一世を風靡したプロムナード・コンサートについて、新聞・雑誌等の文献資料と楽譜の分析を通じて歴史と実態を研究。安価な入場料で快適な娯楽空間を提供し、演奏会文化を庶民に普及・定着させたこと、ここでは送り手と受け手の間に双方向のコミュニケーションが成立していたこと、指揮者ジュリアンの実践が今日の「クラシック音楽」概念の成立に一定の役割を果たしたこと、などを明らかにした。

研究成果の概要(英文): The history and reality of promenade concerts, began in Paris in 1830s and flourished in London thereafter, are investigated through the analysis of contemporary newspapers, magazines and sheet music. They provided comfortable entertaining space in reasonable price and popularized the concert culture. There were two-way communication between sender/musicians and receiver/audience. Louis Jullien, a representative figure of promenade concerts, has begun "classical concerts", which have played a certain role in the formation of today's concept of "classical music."

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	1400000	420000	1820000
2010 年度	1200000	360000	1560000
2011 年度	900000	270000	1170000
年度			
年度			
総 計	3500000	1050000	4550000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード: 音楽史、文化史、演奏会、ロンドン、19 世紀、プロムナード・コンサート、ポピュラー音楽、クラシック音楽

1. 研究開始当初の背景

公開演奏会という社会制度は、近代における市民的音楽文化の象徴であり、蓄音機の発明によって音楽伝達に大変革がもたらされるまでの、最も一般的かつ有効な音楽メディアであった。公開演奏会のあり方は一様ではなく、とくに 19 世紀中葉からは、教養市民

層を対象として洗練の度を高めていくハイ・カルチャーとしての演奏会と、より娯楽性や社交性が強調されたポピュラーな演奏会との 2 系統に大きく分かれていく。

だが、これまでの公開演奏会の研究の多くは前者に重点を置いており、ポピュラー系演奏会に関しては基本的な資料整備さえ殆ど

なされていないという実情があった。

2. 研究の目的

前項で述べたような公開演奏会研究の偏りを是正すべく、本研究では、近代のポピュラー演奏会について次の3つの観点から資料整備と実態の解明を進める。

- (1) 同時代文献に基づく演奏会データベースの構築
- (2) 同時代楽譜に基づく具体的な演目の復元
- (3) ポピュラー演奏会の実態と歴史的意義に関する総合的考察

3. 研究の方法

前項で挙げた3点について、具体的には次のように研究を進めた。

- (1) ロンドンについては *The Times* や *Musical World*、パリについては *La revue et gazette musicale de Paris* など、同時代の新聞や雑誌等から、ポピュラー演奏会、とくにプロムナード・コンサートに関する記事や広告を収集し、データベース化した。
- (2) 大英図書館やパリ国立図書館に保存されている楽譜資料を調査し、当時の演奏会で演奏された作品や演奏会そのものの音楽的実態を研究した。
- (3) 演奏会データベースの吟味からプロムナード・コンサートの演目や入場料、設備などの実態や同時代の評価などを調査した。またそこで取り上げられた楽曲の楽譜を検討・分析し、その音楽的特徴を調べた。またそれらの知見をもとに、プロムナード・コンサートの歴史的意義を考察した。

4. 研究成果

- (1) 予備的・補助的な研究として、19世紀初頭のロンドンにおける庶民的音楽文化の状況を概観すべく、ディケンズ Charles Dickens(1812-70)の小説『デイヴィッド・コパフィールド』に登場する音楽場面を調査した。当時の庶民的音楽文化についての資料が乏しい中で、小説とはいえディケンズが伝えてくれる情報は貴重なものである。自伝的小説といわれる当該作品には、およそ1820年代から30年代はじめの音楽状況が描かれていると考えられる。

音楽的場面の内容を検討すると、最も多いのは歌に関する記述で、14箇所13曲。ほとんどが一時代前の劇場で生まれたものだが、歌っている人々の階級と曲の傾向に関連性はなく、一時代前の劇場で発信された音楽が人々の間に広く伝播し、共有のレパートリーとして定着していったことがうかがえた。

器楽やダンスに関する記述もあり、人々の生活に浸透していることは伺えるが、ディケンズの記述は具体性に欠ける。劇場に関してはディケンズが高く評価しており、庶民の娯

楽として親しまれていたことも伺える一方、演奏会についての記述は実質的には皆無であり、少なくともディケンズにとって演奏会はダンスや芝居ほど魅力的なものではなかったらしい、ということがうかがえた。

- (2) *The Times* 紙のオンラインデータベース Times Archive に基づく演奏会データを用い、1830年ロンドンの演奏会状況を全般的に調査した。初期検索結果279件を整理して得られた有効な演奏会の総数は44、そのうち個人演奏会(benefit concert)が25、Philharmonic Societyなどの組織的演奏会が13。入場料が明記されているのは20件で、そのうち16件が10シリング6ペンスであった。当時の年収の統計などをもとに1ポンド=3万円、1シリング=1500円で換算すると、10シリング6ペンスは15750円。劇場の天井桟敷席は1シリング(1500円)だったから、芝居と比べて演奏会は約10倍の高嶺の花であり、(前項で見た)ディケンズの描いた状況が入場料の点から確認できた。

- (3) そうした状況を変えたのがプロムナード・コンサートであった。

プロムナード・コンサートはパリで始まった。1833年夏に作曲者・指揮者ミュザール(Philippe Musard, 1792-1859)が始めた演奏会は、噴水や彫刻で飾られカフェや長椅子なども設えられたくつろいだ空間の中で、大編成のオーケストラが多彩な演目を優れた演奏で聴かせ、「毎晩大入り満員」の大好評を博した。その後もプロムナード・コンサートは毎年夏冬に開催され、パリの娯楽を代表する風物詩となった。

1836年にはミュザールの対抗馬としてジュリアン(Louis Jullien, 1812-1860)が登場、派手なパフォーマンスでミュザールに劣らぬ人気を得る。こうした演奏会について、あるイギリス人観光客は「わずか10ペンスの音楽の楽園」と祖国の雑誌に報告している。

こうしてプロムナード・コンサートの評判はイギリスに伝わり、1838年1月にはロンドンで最初のプロムナード・コンサートが開催される。最初はさほど人気が出なかったが、1840年にミュザール、41年にはジュリアンが招聘され、それをきっかけに人気が高まって定着。ミュザールは41年末に帰国するがジュリアンはその後も留まり、20年間にわたって一人でロンドンのポピュラー演奏会文化を牽引することになる。

- (4) ジュリアンの演奏会は入場料が1シリング(1500円)。それまでの演奏会の相場の10分の1、劇場の天井桟敷と同額であった。プロムナード・コンサートの登場によって、ようやく演奏会は劇場と同等の大衆性を獲得

したのである。

シーズン中はロンドンを代表するドルリー・レーンやイングリッシュ・オペラ・ハウスといった劇場で演奏会を開催、シーズン・オフには地方公演も行った。演目はオペラ序曲や交響曲、器楽独奏などとカドリーユやワルツといった舞曲を取り混ぜた多彩なもので、中でもジュリアン自作のカドリーユはしばしば時事的な題材や国民意識を涵養するようなテーマを盛り込んで人気を博した。

こうした通常の演奏会以外にも、1845 年からは夏にケンジントンのサリー動物園で「モンスター・コンサート」を開催。1853/54 年にはアメリカ演奏旅行を実行し、ニューヨークでの 1 万人規模の演奏会ほか各地で 200 回以上演奏会を行った。

(5) ジュリアンの影響力は大きく、ロンドンではジュリアン人気にあやかった安価な演奏会も登場、当時増加しつつあった幻燈や蠟人形などの見世物とともにロンドンの庶民の娯楽として浸透する。

一方ジュリアン自身は楽譜出版や劇場経営にも手を広げた結果、経済的に破綻。1858/59 年に各地で「告別演奏会」を開いた後、フランスに帰国して病死する。

ロンドンのプロムナード・コンサートはその後マンス(August Manns, 1825-1907)やメロン(Alfred Mellon, 1820-1867)らによって継承されるが、次第に衰退。しかし 1895 年にウッド(Henry Wood, 1869-1944)が始めたプロムナード・コンサートは、ジュリアンのような娯楽性は乏しいものの人気を集め、それが今日もロンドンの夏に開かれている「BBC プロムス」に繋がることになる。

(6) プロムナード・コンサートで最も人気を博したジャンルはカドリーユ(quadrille)であった。カドリーユはスクエア・ダンスの一種で、連続する 5 部分からなり、2 組ないし 4 組の男女ペアが四角く陣取って踊る。プロムナード・コンサートでは、それが演奏用のレパートリーとして愛好された。その実態はどのようなものであったか、を大英図書館所蔵の楽譜について調査した。

大英図書館 (BL) のカタログに記載された楽譜の曲数を見ると、ミュザール作品全 233 曲のうち 195 曲(83.7%)、ジュリアンでは全 205 曲のうち 95 曲(46.3%)をカドリーユが占める。その多くは当時流行のオペラやバレエの主題に基づくものだが、ほかに国や民族にちなんだもの、時事的な話題に絡んだものも多い。

それらの中から、当時人気の高かったミュザールの《こだまカドリーユ Les Echo quadrille》とジュリアン《大英陸軍カドリーユ British Army Quadrille》について、BL

所蔵のパート譜(BL 整理番号 f.415.d.(8.)および h.1549)から総譜を復元し、音楽的特徴を分析した。

ミュザールの曲では複数の楽器の同じ箇所装飾的な変奏が指定されているが、それらを同時演奏するとカオス状態になってしまう。現実にはどれか 1 パートだけのソロが演奏されたはずだが、どのパートが演奏するかは、恐らくは演奏本番の空気と聴衆や演奏家とのやり取りの中で臨機応変に決められたと考えられる。

一方ジュリアンの曲はオーケストラと 4 つの軍楽隊による大編成で、カドリーユ本来の 5 部分の舞曲に大幅な追加や挿入が行われ、ほとんど交響詩と呼べるような規模と描写的内容を実現している。各地方の軍楽隊を特徴付ける旋律なども取り入れており、大オーケストラを駆使して聴衆の共同体意識や愛国心を鼓舞したものと思われる。

カドリーユは、華やかなエンターテインメントであると同時に、演奏家と聴き手をの双方向のコミュニケーションを実現し、また当時の社会的・政治的な理念を伝達し媒介するメディアであった。

なお、大英図書館およびパリ国立図書館の現地調査によって、カタログ化されていない多量の作品が所蔵されていることが判明した。残念ながら現段階ではそれらの具体的な内容調査までには至っておらず、今後さらに調査を続けることが必要である。

(7) ジュリアンは 1844 年から”classical concert”あるいは”classical night”と呼ばれる一連の演奏会を開始する。そこでは演奏会の前半に classical と評される作曲家の作品をまとめ、後半は通常のプロムナード・コンサートと同様多彩な演目が並んだ。

ここで classical の語が意味するのは、「一般の愛好家 amateur にとってはややとっつきにくくそうでも、識者 connoisseur の評価が高く、愛好家が『自分たちももっとそれに触れてみたい』と思うような音楽」と解される。注意すべきは、ここでの classical の対象と、現代の「クラシック音楽」とは必ずしも同じではない、ということである。そもそもジュリアンのレパートリーを今日の目から見れば、全てが「クラシック音楽」に含まれるだろう。だがジュリアンが classical とみなしたのは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、メンデルスゾーンといった特定少数の作曲家だけだったのである。

ジュリアンのクラシカル・コンサートと同様の試みは後継者であるメロンやマンスにも受け継がれるが、その中で、演奏会の構成要素を classical なものと、その対立概念としての popular なものとに二分する考え方も出てくる。だが、ここでも classical と popular

の内容は現代の「クラシック音楽」「ポピュラー音楽」とは異なる。今日から見れば「クラシック」に属するヴェルディやバルフの作品がpopularと見なされていたりするのである。

(8) 前項で見たような popular および classical 概念の今日との違いを検証するために、文献データベース(Google Books および Times Archive)を用いて“popular music”と“classical music”という語がそれぞれいつ頃からどのような意味合いで使われるようになり、また今日の「ポピュラー音楽」「クラシック音楽」に繋がるようなカテゴリー意識がいつ頃から生まれたかを調査した。

“popular music”の最初の用例は 1781 年。その後 1819 年までに 16 の用例があるが、その段階では、“popular”の意味についてもカテゴリー意識についてもばらつきがあり、社会の共通理解には至っていない。その後 1830 年代から「広く流布している」「新しい」音楽という意味が多くなり、1840 年代から 50 年代にかけて「理解しやすい」「民衆向きの」音楽という用法も増えてくる。

1856 年に William Chappell の著書 *Popular music of the Olden Time* が出版されて大きな反響を呼び、“popular music”という語は一般に定着。こうして「理解しやすい、民衆向きの新しい音楽」としての“popular music”カテゴリーが 1850 年代後半に確立する。

一方、“classical music”の最初の用例は 1795 年だが、これは例外的な存在で、継続的に用例が現れるのは 1810 年代に入ってから。しかし 1830 年ころまでは意味も定まらず、カテゴリーとしての共通理解も見られない。

その傍ら、1810 年頃から特定少数の作曲家/作品が「古くても価値あるもの」として演奏会の標準レパートリーに組み込まれるようになる。これがジュリアンの classical の概念に繋がるのだが、しかしそれは、タームとしての“classical music”の用例に影響を与えることはない。

“classical music”の用例は 1830 年代から増え、「標準的な」「価値が高い」という意味に加えて「古い」というニュアンスを含む例が見られるようになる。1840 年代から 50 年代にかけて用例はさらに増え、“classical music”と“popular music”を対置する例も多くなる。

上記のように 1850 年代後半に「理解しやすい新しい音楽」として“popular music”の概念が定まると、その影響を受けて“classical music”の概念もより明確になる。特定少数の「古くても価値あるもの」に加えて、「理解しにくい音楽」や「もはや古くなった音楽」

が追加されていくのである。こうして今日に繋がる「クラシック音楽」カテゴリーが成立する。

ちなみに演奏会研究の第一人者である William Weber は、「特定少数の古典」という概念が成立した 1810 年頃をそのまま「クラシック音楽」カテゴリーの成立時期と見ているようだが(*The Great Transformation of Musical Taste*, Cambridge 2008)、1810 年頃の時点ではまだ今日のようなカテゴリー意識はなく、カテゴリーとしての成立は 1850 年代のことと見るのが妥当と思われる。

(9) こうして、プロムナード・コンサートに代表されるポピュラー・コンサートは、19 世紀の人々に安価な「音楽の楽園」を提示して、かつては高嶺の花であった演奏会文化を庶民の手の届くものにし、その実践を通じて近代的な音楽観の土台を形成したのである。

(10) なお、研究当初の予定ではパリとロンドンのみならずアメリカや日本などにおけるポピュラー演奏会の実態も調査し、比較研究を行うつもりであったが、残念ながら 3 年間の範囲内ではもっぱらロンドンにおけるプロムナード・コンサートの概略を描くだけで手一杯であった。パリとロンドンについても基本的な資料調査など課題は残っており、当初の研究計画を全うするまでになすべきことはまだまだ多い。今後の課題としてさらに作業を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- ①吉成 順、19 世紀のプロムナード・コンサート——ミュザールとジュリアンの音楽活動に関する予備的調査報告——、国立音楽大学研究紀要、査読無、第 44 集、2010、47-58
- ②吉成 順、電気ウナギのいる演奏会と宮廷舞踏会——1840 年代ロンドンにおける社交的・娯楽的音楽空間——、東経大論叢、査読無、第 31 号、2010、71-84
- ③吉成 順、“popular music”の初期の用例とジャンル意識、コミュニケーション科学、査読有、第 32 号、2010、101-132
- ④吉成 順、モーツァルトはいかにして「クラシック」になったか、新モーツァルティアナ：海老澤敏先生傘寿記念論文集、2011、426-437

〔学会発表〕(計 2 件)

- ①吉成 順、“classical music”の初期の用例とカテゴリー意識、日本音楽学会第 61 回全国大会、2010 年 11 月 6 日、愛知芸術文化

センター

②吉成 順、“popular music”の初期の用例
とカテゴリー意識、日本ポピュラー音楽学会
第22回年次大会、2010年11月]28日、東京
藝術大学音楽学部千住校地

〔その他〕

博士論文

吉成 順、19世紀中葉のロンドンにおける大
衆的演奏会文化の実態と意義、東京経済大学
大学院コミュニケーション学研究科、2012年
3月学位取得(博士(コミュニケーション学))

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉成 順 (YOSHINARI JUN)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：60183703

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者